

## ブータンの大学との国際共修プログラム実践と 教育的価値に関する考察<sup>1)</sup>

草 郷 孝 好\*・長谷川 伸\*\*

### A Study on the Practice and Educational Value of an International Co-learning Program with a Bhutanese University

Takayoshi KUSAGO and Shin HASEGAWA

#### Abstract

To nurture young people from an international perspective who can respond to the advancement of globalization and contribute to the creation of an intercultural society, it is important to develop a new method in tertiary education, one of which is the development of international co-learning programs. This paper focuses on the International Co-Learning Program (MSBI@BT: Making Sustainable Society By Interaction at Bhutan), which was developed and piloted by Kansai University in collaboration with Royal Thimphu College in Bhutan, as a new educational method, and discusses the outline of the program and its educational value to participating students based on educational effectiveness evaluation scales and qualitative data.

Keywords: International co-learning, Bhutan, Sustainable Development Goals (SDGs), educational value, travel/face-to-face, online/distance, educational effectiveness evaluation scales

#### 抄 録

国際化の進展に対応できる国際的視野を持ち、異文化と共生できる社会づくりに資する若者を育成するためには、大学教育の中に、これまでにはない新しいタイプの教育方法を開発する必要がある、その1つが国際共修プログラムの開発である。本論は、新しい教育方法として、関西大学がブータンのロイヤルティンブプカレッジと共同で開発し、試行した国際共修プログラム（MSBI@BT）を取り上げ、プログラムの概要と参加学生への教育的価値について、教育効果評価尺度と定性データをもとにして論じる。

キーワード：国際共修、ブータン、持続的開発目標（SDGs）、教育的価値、渡航・対面型、オンライン・遠隔型、教育効果評価尺度

---

\* 関西大学社会学部教授

\*\* 関西大学商学部准教授

1) 本論文は、2018年度関西大学教育研究高度化促進費において、課題「ブータンにおける持続的コミュニティ創生国際共修プログラムの共同開発」として促進費を受けたプロジェクトの成果を公表するものである。

## 1. はじめに

2018年4月、日本政府は入国管理制度法制度を改正、従来の消極的移民政策を転換し、長期で日本居住を可能とする制度に切り替えた。この背景には、少子高齢化の進んだ日本における国内の労働力の逼迫という側面がある。海外からの移入者が増加すれば、日本社会の内なる国際化は待たなしの状況となっていく。国際化が進む社会では、生活様式、言語、文化の異なる人々がともに暮らすことが日常化していく可能性が高い。それは異文化への理解と主体的に社会参画する市民の育成が求められている。

しかし、主体的な市民の育成は容易ではない。「我が国と諸外国の若者の意識に関する調査（平成25年度）」<sup>2)</sup>によれば、日本の若者の場合、「自分自身に満足しているか」の問いに対して、「そう思う」または「どちらかといえばそう思う」に回答した割合は45.8%、「自分には長所があると思うか」の問いに対して、「そう思う」または「どちらかといえばそう思う」に回答した割合は70%に届かなかった。「うまくいくかわからないことにも意欲的に取り組むか」に対して、「そう思う」または「どちらかといえばそう思う」と回答したのも52.2%であった。また、「自分の将来について明るい希望を持っているか」に対して、「希望がある」または「どちらかといえば希望がある」と回答した割合は61.6%であり、他国は軒並み80%以上であるのと対照的な結果であった。なぜ日本の多くの若者の自己肯定感が低いのか、また、将来への明るい展望を持ってないているのが深刻な問題であり、若者をどのように育成するかという議論は、日本の大学教育のあり方の問い直しにつながる。とりわけ、従来の知識伝授型の講義から体験や実践を通じて主体性を形成する学びへと教育方法の拡充が模索され、大学教育において、さまざまな試行錯誤が行われている。

関西大学は、教育理念として「学の実化」<sup>3)</sup>を掲げ、教育推進部の設置、アクティブラーニング導入など、学生の主体性を磨くための教育を拡充してきた。また、国際的視野で、物事を俯瞰し、行動できる学生を育成すべく、海外の大学との連携協定を積極的に進め、交換留学などの学生交流を推進してきた。国際化の進展に対応できる国際的視野を持ち、異文化と共生できる社会づくりに資する若者を育成するためには、大学教育の中に、これまでにはない新しいタイプの教育方法を開発する必要がある、その1つが国際共修プログ

---

2) 日本を含めた7カ国の満13～29歳の若者を対象とした意識調査。

<https://www8.cao.go.jp/youth/whitepaper/h26gaiyou/tokushu.html> (2021年5月28日閲覧)

3) 大学が研学の府として学問における真理追究だけに終わるのではなく、社会のあるべき姿を提案し、その必要とするものを提供することによって「学理と実際の調和」を求める考え方。<https://www.kansai-u.ac.jp/ja/about/philosophy/> (2021年5月28日閲覧)

ラムの開発である。

そこで、本論は、新しい教育方法として、関西大学がブータンのロイヤルティンパーカレッジと共同で開発し、試行した国際共修プログラム（MSBI@BT）<sup>4)</sup>を取り上げ、3年間のプロジェクトの成果として、国際共修プログラムの概要とその教育的価値について論じるものである。

## 2. 国際共修プログラム

### 2-1：教育高度化の必要性

21世紀に入り、ますますグローバル化と情報社会が進展し、貧富の格差の拡大、気候危機などの国際課題が山積する世界において、高等教育に求められている役割も大きく変わってきている。激しく変化する社会の中で、前例にとらわれることなく、柔軟に思考し、行動していく主体的な市民の育成が求められている。そうした市民を育成するには、従来型の知識偏重型の教育方法では十分ではない。大学教育においても、学生自身が現実社会の文脈の中で、修得した知識をどのように活かしていくのかを自ら考え、判断し、行動につなげていくかが問われるようになってきている。このことを中央教育審議会の「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて——生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ——（答申）」（2012年8月28日）は端的に言及している。

生涯にわたって学び続ける力、主体的に考える力を持った人材は、学生からみて受動的な教育の場では育成することができない。従来のような知識の伝達・注入を中心とした授業から、教育と学生が意思疎通を図りつつ、一緒になって切磋琢磨し、相互に刺激を与えながら知的に成長する場を創り、学生が主体的に問題を発見し解を見いだしていく能動的学修（アクティブ・ラーニング）への転換が必要である。（中教審 2012, 9 ページ）

実際、多くの大学で、アクティブラーニング（木野 2005; 中井 2015）の取り込み、フィールドスタディの展開、インターンやボランティア活動といった体験学習が推奨され、多くの大学で取り組みが行われている。近年では、アクティブラーニングを大学教育における新たな教育手法の重要性として捉えるだけでなく、学生が主体的な市民として成長していくかどうかという教育の質の観点から注視していくディープ・アクティブラーニン

---

4) 本プログラムの呼称として、渡航・対面型プログラム参加学生が考案。MSBI@BT（Making Sustainable Society By Interaction at Bhutan）、MSBIは日本語の「結び」と掛け合わせている。

グ（松下 2015）が注目されてきている。

大学教育において実践型や体験型の教育が必要とされている背景には、複雑化する社会課題に取り組むことが必要であるものの、今や、特定の分野の専門知識だけでは十分ではないという事情がある。その典型例が、2015年に国連で国際合意された持続可能な開発のための2030アジェンダ（UN 2015）である。2030アジェンダの理念は、誰一人取り残さない社会の実現と循環型経済システムへの変革にあり、その実現のために、持続的開発目標（SDGs）が設定されている。SDGsは、2030アジェンダの理念と社会面、経済面、環境面の持続性を担保することを目指して、17の目標を設定し、よりよい生き方のできる社会を構築していくものである。

SDGsでは、貧困問題、ジェンダーの課題、持続的なまちづくりなど横断的な課題にどう向き合っていくかを前面に出しており、横断的な解決のために、異なる専門家、社会の中で異なる立場の当事者の協働、超学際的アプローチが必要になってきている。しかし、従来型の講義形式やキャンパス内の学習機会だけでは、社会の多様な主体との協働や実践知を学ぶことは難しい。そこで、課題解決に取り組むための力を涵養するための教育方法として、学生が主体的に学び合う教育プログラムが求められている。

## 2-2：国際共修

2020年のコロナ禍により、国際間の対面型の人的交流は大きく阻害されたものの、対面への代替としてオンラインを活用した国際交流活動が展開された。対面とオンラインの双方を活用し、世界中の人々が容易につながる契機となったのは事実であり、これからも、活発なコミュニケーション、アイデアの共有、そして、ともに行動するなど、多様なつながり方が想定される。このことは、日本の内なる国際化と多文化共生社会への変革に通じるものであり、優先的に取り組むべき課題である。

多文化共生課題を学ぶ機会は、すでに大学教育の中に組み込まれているが、机上で学ぶ知識重視型の学びだけでは、実際の社会生活の中で、多文化理解を持つ市民を育てていくことを保障しない。この問題意識の上で、教育方法を作っていく必要があり、その1つが国際共修プログラムである。

日本において、率先して国際共修<sup>5)</sup>プログラムの開発に取り組んできたのが東北大学である。同大学はグローバルラーニングセンターを立ち上げ、国際共修教育に積極的に取り

---

5) 国際共修は英語では、Intercultural Collaborative Learningである。

組んできた。グローバルラーニングセンターの教員は、国際共修を次のように定義している。

言語や文化背景の異なる学習者同士が、意味ある交流（meaningful interaction）を通して多様な考え方を共有・理解・受容し、自己を再解釈する中で新しい価値観を創造する学習体験を指す。単に同じ教室や活動場所で時間を共にするのではなく、意見交換、グループワーク、プロジェクトなどの協働作業を通して、学習者が互いの物事へのアプローチ（考察・行動力）やコミュニケーションスタイルから学び合う。この知的交流の意義を振り返るメタ認知活動を、視野の拡大、異文化理解力の向上、批判的思考力の習得、自己効力感の増大などの自己成長につなげる正課内外活動を国際共修とする。（末松・秋庭・米澤（2019）p. iii）

要するに、国際共修とは、多様性を認め合う社会の一員としての市民育成教育であり、グループのメンバー同士が相互に作用しあうことによって、1つの事象について、多面的な見方のできる力を身につけ、協働して課題解決や創意工夫していく経験を重ねていく教育活動のことである。

## 2-3：ロイヤルティンパーカレッジ（RTC）との国際共修プログラム

### (1) MSBI@BT プログラム立ち上げの経緯

本プログラムのきっかけは、筆者（草郷）が2014年から2018年までブータンの NGO である Bhutan Centre for Media and Democracy (BCMD) と地域資源マッピング手法による実践的研究<sup>6)</sup>を展開していた時に遡る。BCMD は、2008年に民主化したブータンにおいて、若年世代の市民教育の必要性を認識し、高校や大学のメディア部を通じて、ブータンの地域課題に当事者である住民が主体的に取り組むためのさまざまな研修やワークショップを展開してきた。BCMD は、日本の内発的地域発展手法の1つである地元学手法<sup>7)</sup>に関心を持ち、共同研究を行った。本研究活動を通じて、筆者はブータンの大学教育が抱える課題と日本の大学教育の抱える共通の課題に気づいた。それは、現実に社会で起きる事象について、大学の場を離れた、社会課題に対して、多様な見方をしたり、思考を巡らしたり、課題解決を考える機会が少ないということである。そこで、ブータンと日本の学生が共通のモジュールに学ぶことにより、異なる視座や考え方を混ぜ合わせるプログラムを企画・実施の検討を始めることにした。プログラムのパートナーとして、ブータンにあるロ

6) 途上国中山間地域の内発的發展～ブータンにおける地元学手法導入アクション・リサーチ（挑戦的萌芽研究：<https://kaken.nii.ac.jp/ja/grant/KAKENHI-PROJECT-26570014/> 2021年5月28日閲覧）。

7) 吉本哲郎（2008）を参照のこと。

イヤルティンブーカレッジ (RTC) を選定した。その理由は、アメリカやオーストラリアなどの大学による短期教育プログラムを受け入れ、そのサポートを積極的に推進してきた経験を有すること、また、学内において無線 wi-fi が完備されるなど、共同プログラム実施のパートナーとしての経験とインフラを兼ね備えた最適であると考えたからである。そこで、関大と RTC が共同で教育プログラムを設計し、実施する方向で検討することとなり、2017年に両大学間で大学間連携協定を締結、プログラムの本格的な設計を開始した。そして、関西大学教育研究高度化促進費のプロジェクトに採択され、3年間かけてプログラムを試行することとなった。

## (2) MSBI@BT の目的とテーマ

MSBI@BT の目的は、両大学の国際的共同研究と教育の更なる展開を見据え、世界的な注目を浴びるブータンにおいて、日本とブータン両国の学部生同士の学びあいに置いた。また、MSBI@BT のテーマは、2015年9月に国連の持続的開発サミットで採択された持続的開発のための2030アジェンダ (SDGs) とした。

そもそも、なぜブータンが適切であると考えられたのか、その理由は次の通りである。ブータンは、2008年の民主化移行後、経済、社会、環境、文化を4つの柱に置く「国民総幸福 (GNH) の社会発展モデル」を掲げ、国づくりに邁進している。しかし、ブータン国内では、近年、若者の雇用機会を求めての都市流入が急増、経済格差や社会問題が顕在化しつつある。GNH は、2030アジェンダに沿った持続的発展モデルの1つと国際的に高く評価されているが、現状のままでは、将来世代にわたってブータン独自の持続的社會を実現することへの懸念がある。とくに、若年層の流出が激しい農村地域の持続的コミュニティ創生の必要性が急がれている。そのためには、高等教育機関が社会改善につながる研究を推進し、実践支援の強化が課題である。実際、ブータンの高等教育機関も、変革期にあるブータンの社会変容に着目し、国民の生活現場であるコミュニティレベルの社会変容に関する研究と教育の必要性を認めていた。しかし、ブータンの大学は、社会科学の研究体制がまだ十分には整備されておらず、ブータンの大学単独で展開することが難しいという課題に直面していた。さらに、2018年10月に実施された第3回の下院議員選挙の結果、政権交代が行われることとなり、今後のブータンの国家運営の方向性を学ぶにはまたとないタイミングとなったためである。以上の理由から、異なる教育システムによって形成された視点や異なる生活経験を持つブータンに暮らす学生と日本に暮らす学生が同じテーマや課題に向きあい、自由に発言することで新しい知見を見つけ出す機会として国際共修プログ

ラムを設計、試行することにした。

## 2-4：MSBI@BTのプログラム

MSBI@BTは、日本からブータンに渡航し、RTCに滞在して対面型で行うプログラムとして設計された。しかし、2020年のコロナ禍によって、渡航できなくなったため、オンライン・遠隔型に変更された。そこで、渡航・対面型のプログラム、オンライン・遠隔型のプログラムに分けて順番に説明する。

### 2-4-1：渡航・対面型のプログラム

#### (1) プログラムの特徴

本プログラムの目的は、関大生とRTC生の混成グループで、意見をぶつけ合い、助け合いながら、ともに学び合うことで思考力や洞察力を磨き上げることとした。この目的に沿って、参加学生と教員の役割を次のように規定した。これらの役割は、従来の知識集約型の教育プログラムと大きく異なる点である。

- 学生の役割は、自らよく考え、意見を出し、他人の意見によく耳を傾け、新しい気づきや発想する力を蓄えていくグループワーク（調査、取りまとめ）を通じて、つくる（創る・造る・作る）力を試す。
- 教員の役割は、テーマや課題への取り組み方やグループワークにおけるヒントなどを提供するファシリテーターであり、コーチである。

#### (2) カリキュラムの設計

本プログラムのカリキュラム設計は、関大の教員として筆者2名（草郷、長谷川）とRTCの教員1名の3名のチームでオンライン会議を活用して行った。

カリキュラムは4つのステップから構成された。

#### 【第1ステップ：対話しながら持続的発展について思考を深める】

- ・持続的な発展についての基礎理解を深めるグループワーク。
- ・日本の経済成長の功罪とブータンGNHについてグループワーク。

#### 【第2ステップ：生活の現場を歩いて村人から生活の知恵や課題を学ぶ】

- ・Bjemina村<sup>8)</sup>に入り、コミュニティマッピング（地元学）を実践。

---

8) ティンブー県西部に位置する農村コミュニティの1つ。

【第3ステップ：ゲストスピーカーとともに洞察力を養う】

- JICA ブータン所長とブータンITパーク所長を迎えて、21世紀における持続的発展、コミュニティの発展について意見交換。
- 研修の学びについてまとめるグループワーク。

【第4ステップ：グループ共修成果をプレゼンテーション】

- 新しく学んだこと、気づいたこと、こうすべきではないかという提案などをグループでまとめる共修。
- グループによる RTC 学内で公開報告会、修了式。

(3) プログラムの実際

渡航・対面型プログラムの実施は、2018年10月の参加学生募集開始から2019年3月のブータンプログラム帰国まで半年間にわたった。

本プログラムの参加者は、説明会を開催して、国際共修プログラムの魅力を説明し、参加者を公募した。本プログラムの魅力は、関大の掲げる考動力を発揮できることが本プログラムであるとし、どのような社会を望み、つくりたいのか、ブータン RTC の学生はどんなことを考えているのか、RTC と関大の学生同士で何らかの発見があるのかを体験しながら学んでいくことを説明した。その結果、4名の学生（1年生1名、2年生3名）が参加した。他方、RTC は、本プログラムの詳細を説明し、学内で公募し、4名（2年生2名、3年生2名）の学生の参加が決定した。関大と RTC の計8名の学生が渡航・対面型プログラムに参加した。

関大からの参加学生には、ブータンの渡航準備として、事前学習を2018年11月、12月、2019年1月の3回実施した。事前学習では、ブータン国に関する基礎情報の共有、ブータンの社会課題、学生による文化交流プログラムの準備にあてた。

本プログラムの詳細なスケジュールは、表1に示している。1日目と最終日にあたる7日目に、参加学生全員に対して、事前と事後の教育効果調査を実施した。この結果は、3節で説明する。

各セッションの講師は、RTC と意見交換し、該当テーマに経験と知見のある方を選定し、依頼した。たとえば、GNH のセッションに関しては、ブータンの元教育大臣・RTC 前学長に、コミュニティマッピングに関しては、ブータンの若者育成に取り組む BCMD の代表に講師を依頼した。また、MSBI@BT プログラムの総まとめである持続的社会についてのセッションのゲストスピーカーには、ブータンの社会経済課題に造詣の深い JICA ブ



表1 MSBI@BT 渡航・対面型プログラム内容

日程	プログラム内容
1日目	<ul style="list-style-type: none"> <li>MSBI@BT イントロダクション</li> <li>事前の教育効果調査実施</li> <li>RTC 学生によるキャンパス案内</li> </ul>
2日目	<ul style="list-style-type: none"> <li>持続的開発と SDGs (カードゲーム「2030 SDGs」)</li> <li>学びの振り返りと意見交換</li> <li>ティンブー文化施設視察&amp;学生による文化交流</li> </ul>
3日目	<ul style="list-style-type: none"> <li>開発の光と影：日本の事例：教員講義と意見交換</li> <li>もう1つの開発：ブータンのGNH：ゲスト講話と意見交換</li> <li>開発モデルについてのクラス討論</li> <li>学びの振り返りと意見交換</li> <li>地元学によるコミュニティマッピングガイダンスと講義</li> <li>ブータン紙工場訪問</li> </ul>
4日目	<ul style="list-style-type: none"> <li>Bjemina 村フィールドワーク①：RTC・関大混合グループ別</li> <li>村人と村歩き：インタビュー、質問票調査</li> </ul>
5日目	<ul style="list-style-type: none"> <li>Bjemina 村フィールドワーク②：グループ別マッピング作成・報告</li> <li>RTC 学生制作映画上映会&amp;関大生による大学紹介・茶会</li> </ul>
6日目	<ul style="list-style-type: none"> <li>持続的社會についてブータン人と日本人のゲスト講話とクラス意見交換</li> <li>学びの振り返りと意見交換</li> <li>MSBI@BT プログラムの学びのまとめと報告準備：グループ別&amp;個人</li> </ul>
7日目	<ul style="list-style-type: none"> <li>MSBI@BT プログラムの学びについて報告会</li> <li>修了式&amp;修了証書授与</li> <li>研修事後評価実施</li> </ul>

ブータン事務所長とブータンの若者の雇用創出を目指すIT産業を牽引するITパーク所長に依頼した。このように、各課題に精通する専門家の方々に協力していただいたことで、通常の授業では得られない中身の濃い話をもとにして、深みのある意見交換を行うことができた。

#### 2-4-2：オンライン・遠隔型のプログラム

MSBI@BTは、渡航・対面型プログラムとして企画され、2020年3月に2度目のプログラム実施を準備した。しかし、2020年1月から深刻化した新型コロナウイルス感染症の拡大により、ブータンで渡航・対面型プログラムを実施することが困難な状況となった。そこで、プログラム実施時期を2020年10月-11月に設定し直し、オンライン・遠隔型プログラムを設計、

実施することとした。ここで、オンライン・遠隔型プログラムの特徴、カリキュラムと実際についてまとめておく。

#### (1) オンライン・遠隔型プログラムの必要性とテーマ設定

新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の拡大により、世界規模で、「新常態社会（New Normal Society）」への移行が始まった。この新たな動きの中で、2030アジェンダ（SDGs）が掲げる「誰一人取り残さない社会」の実現を目指していくことになる。そのためには、従来とは異なる見方、発想や行動が必要であり、異なる社会で暮らす学生同士の交流には意味がある。そこで、ビデオ会議ツールを活用し、RTCと関大の学生がオンラインで意見交流と対話によって学び合う共修セミナーが必要とされた。オンライン・遠隔型プログラムのテーマは、Can we achieve SDGs under New Normal Society ~ key issues and new ideas?（新常態社会でSDGsを実現できるのか? : カギとなる課題と新しい提案）とした。渡航・対面型プログラムのカリキュラムに組み込んでいた地元学によるブータン農村の村歩きはオンライン・遠隔型では実施できない点が両プログラムの間の決定的な違いである。

#### (2) カリキュラムの設計

本プログラムのカリキュラム設計は、関大の教員として筆者2名（草郷、長谷川）とRTCの教員1名の3名のチームでビデオ会議ツールを活用して行った。カリキュラムの柱は、3回にわたるビデオ会議ツールによる国際共修セミナーとセミナー期間中の参加学生への1回の個別指導で構成した。カリキュラムの詳細は次の通りである。

- ① 1回目：セミナーの説明、自己紹介、事前アンケート。コロナ後の社会についてオープンな意見交換セッション。教育、医療、環境、経済について、COVID-19発生後の社会変化に着目し、お互いの国における経験をもとに話し合う。また、2週間後の2回目のセミナーで意見交換するためのテーマを絞りこむ。
- ② 個人指導：10月5日から10月17日まで：参加学生が単独で自分で選択したテーマ（トピック）について探求し、発表のための準備期間。10月10日または11日に、コーチがオンラインで1時間程度の個別アドバイスを行う。コーチは1名以上で対応する。
- ③ 2回目：初めに絞り込んだテーマ（トピック）について、個人またはチームで調べてきた内容を発表し、全員で意見交換。どのような課題があるのか、そして、どのような代案があるのか、対話する。
- ④ 3回目：ゲストを交えての共修セミナーセッション。前半は、ゲスト2名のトーク（各

15分～20分程度)。各トークについて、全員で質疑応答と意見交換。後半は、オンライン・遠隔型セミナーを通じて得たさまざまな気づきを共有し、今後、さらに深めていきたいことについて2名のゲストを交えて、自由討論を行う。

### (3) プログラムの実際

オンライン・遠隔型プログラムの実施は、2020年8月のセミナー準備から2020年11月のブータンプログラム終了まで4ヶ月にわたった。

本プログラムの参加者は、2020年3月に計画されていた渡航・対面型プログラムに参加予定の学生の中から3名の関大生（2年生1名、3年生1名、4年生1名）であった。他方、RTCでは、学内公募により、4名（1年生1名、2年生2名、3年生1名）の学生が参加した。関大とRTCの計7名の学生がオンライン・遠隔型プログラムに参加した。

関大の参加学生には、渡航・対面型プログラムの準備のため、事前学習を2019年11月、12月、2020年1月、2月の4回実施していた。事前学習の内容は、ブータンに関する基礎情報の共有、ブータン渡航プログラムにおける学生主体の文化交流プログラム活動の準備、さらに、ブータンの社会課題について学習した。また、オンライン・遠隔型プログラムに切り替えてから、プログラム開始の2週間前に、参加学生全員に対して次の課題を与えた。

- 新型コロナ禍を通じて、関心を持つようになった社会課題を1つ以上考えて、その内容を報告すること。報告の際、取り上げた課題に関心を持つ、あるいは、重要と考える理由を統計データとエピソードなどを用いて説明できるように準備すること。

渡航・対面型の中核に据えていた村歩きプログラムが実施できないことから、オンラインゼミの形式でありながらも、RTC生と関大生がそれぞれのテーマを探求する過程で、プログラムの参加者同士が相互に意見交換やアドバイスしあうことによって、自己探求の力を高めたり、参加者同士のネットワーク構築を促すためであった。

教員チームは、渡航・対面型と同様、コーチングに徹し、学生同士の交流を促したり、個々の学生が自ら選択した社会課題に取り組むための助言を与えた。最終回では、ゲストスピーカーとしてブータンから1名、日本から1名、計2名の方に加わってもらうことにした。ブータンからは、渡航・対面型プログラムと同様、ITパークの所長に依頼した。他方、日本からは、長年にわたり、ブータンの教育発展に尽力されてきた星椋学園のこども財団の方をお願いした。ゲストの講演と意見交換によって、参加学生の国際共修プログラ

ムによる学びを確かなものとする事ができた。

### 3. 国際共修プログラムの教育効果の評価

MSBI@BTの教育効果の測定は、渡航・対面型のMSBI@BT2019と類似するプログラムSUIJI/SLP<sup>9)</sup>で開発・利用されている尺度(5つの力)を用いて行った。(A)まみれる、(B)掘り下げる、(C)行動をおこす、(D)共に創る、(E)経験に学び、伝える、を「5つの力」とし、それぞれの力について評価項目表2を参加学生に明示してプログラム開始時と終了時に、自己評価として0から4までの範囲で記入してもらった(最大値4、最小値0)。「5つの力」は、それぞれ5つの評価項目の平均値によって計算される。例えば、(A)まみれる力は以下の5評価項目によって構成されている。

なお、この尺度を開発したSUIJI/SLP担当者は「5段階評価としたが、評価基準は具体的に示していないため、個々人の評価は恣意的になりがち」「評価というよりも振り返りの手段」としている<sup>10)</sup>。

表2 「5つの力」評価項目

- A-1: 人と積極的に関係がつかれる
- A-2: 新たな環境に適応できる (はじめてのことに挑戦できる)
- A-3: 異なる文化や考え方を理解し、尊重できる
- A-4: 他者の話をしつかり聞き理解することができる
- A-5: 新たな環境で、健康管理・自己管理ができる

A. まみれる	
	A-1: 人と積極的に関係がつかれる
	A-2: 新たな環境に適応できる (はじめてのことに挑戦できる)
	A-3: 異なる文化や考え方を理解し、尊重できる

9) SUIJI/SLPとは、日本・インドネシアの学生が、2-3週間にわたって共に農山漁村に滞在し、現実の課題に取り組むサービスマスタープログラム。このプログラムは、地域に立脚して未来社会の持続的発展に貢献できる国際的なサーバント・リーダー(地域社会で献身的に活動できるリーダー)の養成を目的としたもので、愛媛大学・香川大学・高知大学とインドネシアのガジャマダ大学・ボゴール農業大学・ハサヌディン大学の6大学により構成されたSUIJI(Six-University Initiative Japan Indonesia)コンソーシアムによって運営される(愛媛大学SUIJI推進室「日本・インドネシアの農山漁村で展開する6大学協働サービスマスタープログラム」、<https://suiji.agr.ehime-u.ac.jp/>、2021年6月26日閲覧)。

10) 島上宗子・小林修「学生の学び・成長をいかに評価するか——SUIJIサービスマスタープログラムを事例に」大学教育における「海外体験学習」研究会、2016年10月16日。

	A-4： 他者の話をしつかり聞き理解することができる
	A-5： 新たな環境で、健康管理・自己管理ができる
B. 掘り下げる	
	B-1： 驚き・違和感・疑問を言葉にできる
	B-2： 事実と意見を区別できる
	B-3： さまざまな側面から物事をみることができる（経済・文化・環境、現在・過去・未来）
	B-4： 地域にある工夫や知恵を発見できる*
	B-5： 事実にもとづき課題を深く考察できる
C. 行動をおこす	
	C-1： 課題について考察した結果を他者に説明できる
	C-2： 率先して行動できる
	C-3： 目標を達成するため、具体的な計画を立てられる
	C-4： やる気を維持しながら、最後までやりとげられる
	C-5： 状況の変化に応じて行動を見直せる
D. 共に創る	
	D-1： 人は不完全であるという前提に立ち、長所と短所を理解することができる
	D-2： 個性・能力に応じて役割分担ができる
	D-3： チームのメンバーの状況を観察し、配慮できる**
	D-4： 自分の考えを考えの違う相手に伝えられる
	D-5： 互いに納得できるまで相手と話し合うことができる
E. 経験に学び、伝える	
	E-1： 記録・メモをとり、整理することができる
	E-2： 成功・失敗から教訓をひきだせる
	E-3： 自らの学びを文章で相手に伝えることができる
	E-4： 伝える相手に応じて、適切な手段・メディアを提案できる
	E-5： MSBI@BT での経験を自分の生活・人生に関連付けて見直すことができる

\* 2020年度はオンライン化のためこの項目は削除した。

\*\* 2020年度はオンライン化のため「チームの」→「このセミナー参加」と修正した。

本プログラムの評価結果を見てみよう。全体と大学別の平均値に着目すると、実施年を問わず、大学を問わず、プログラム前後で、概ね数値が1未満ではあるが上昇している（表3、図1～図6）。このことから、このプログラムには教育効果があったと考えられる。興味深いのは、渡航・対面型の2019年度と、オンライン・遠隔型となった2020年度を比較してみると、ほぼ同じ結果が得られていることである。コストのかかる渡航・対面型とオンライン・遠隔型がほぼ同じ教育効果が得られるのであれば、我々が想像する以上に、オンライン・遠隔型が効果的である可能性がある。一方で、こうした測定方法では現れないも

の、例えば、長期的に徐々に効果が出てくるもの、言語化や数値化が難しいものを検出できなかつた可能性がある。さらに、関大よりも RTCの方が全体として高い数値が出ていることも興味深い。文化的背景や自己肯定感の高低が関係しているかもしれない。

表3 「5つの力」尺度による評価結果

	関大生平均			RTC 学生平均			全体平均		
	Before	After	A-B	Before	After	A-B	Before	After	A-B
2019年度：渡航・対面型									
A. まみれる	3.0	3.1	0.1	3.4	3.9	0.5	3.2	3.5	0.3
B. 掘り下げる	2.1	2.4	0.4	2.9	3.6	0.7	2.5	3.0	0.5
C. 行動をおこす	2.6	2.8	0.2	3.2	3.7	0.5	2.9	3.2	0.4
D. 共に創る	2.9	3.0	0.2	3.4	3.6	0.3	3.1	3.3	0.2
E. 経験に学び、伝える	2.7	2.6	-0.1	3.1	3.8	0.8	2.9	3.2	0.4
2020年度：オンライン・遠隔型									
A. まみれる	2.9	3.1	0.2	3.4	3.7	0.3	3.2	3.4	0.3
B. 掘り下げる	2.4	2.3	-0.1	3.2	3.8	0.6	2.9	3.1	0.3
C. 行動をおこす	2.1	2.3	0.2	3.2	3.5	0.3	2.7	3.0	0.3

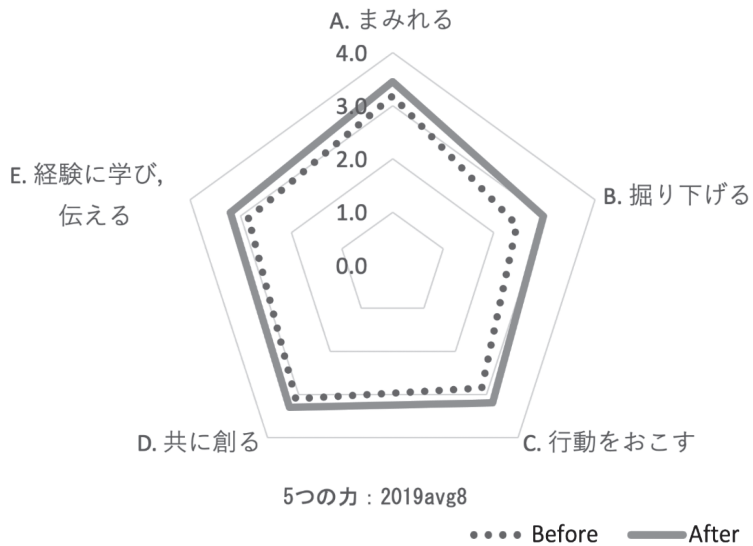


図1 2019年度：全体平均

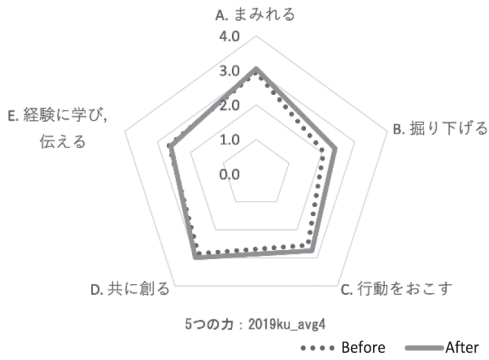


図2 2019年度：関大生平均

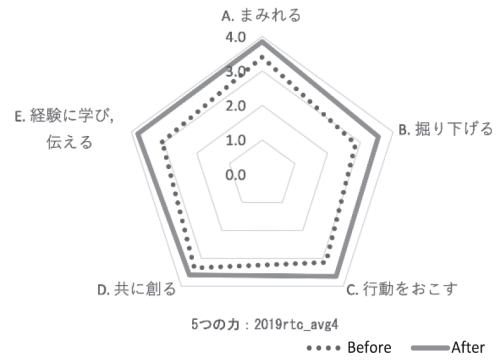


図3 2019年度：RTC学生平均

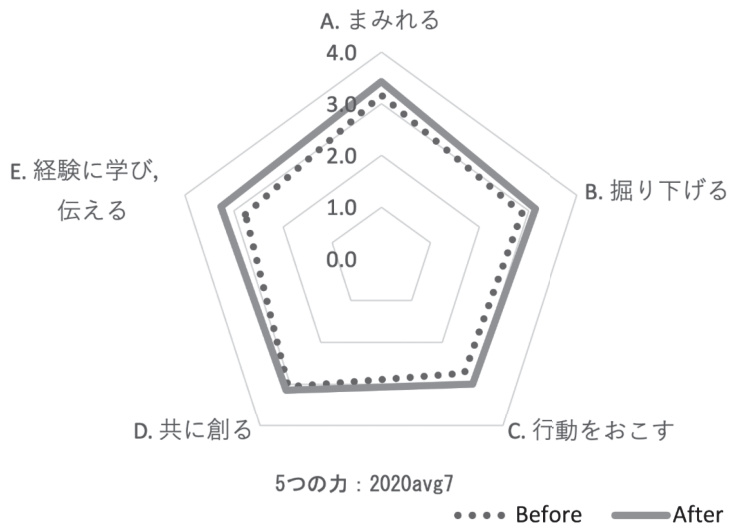


図4 2020年度：全体平均

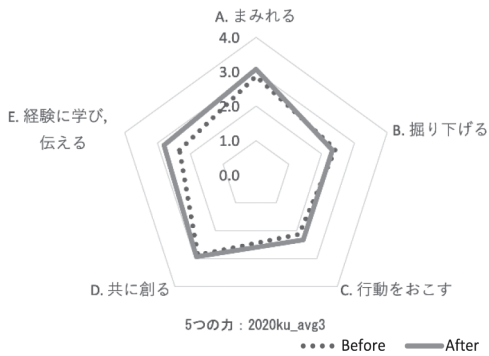


図5 2020年度：関大生平均

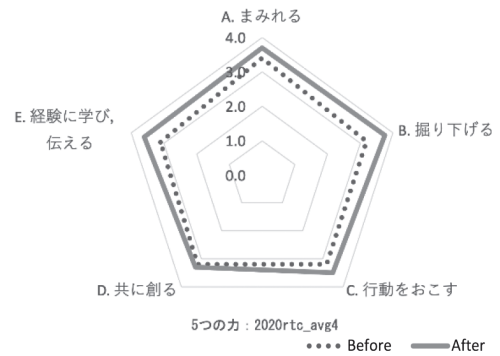


図6 2020年度：RTC学生平均

D. 共に創る	2.9	2.9	0.1	3.2	3.3	0.1	3.1	3.1	0.1
E. 経験に学び、伝える	2.3	2.8	0.5	3.1	3.6	0.5	2.8	3.3	0.5

#### 4. 参加学生の振り返りに基づく教育効果

参加学生は、渡航・対面型、オンライン・遠隔型、どちらのスタイルのプログラムであっても、プログラム終了時に、個人エッセイ<sup>11)</sup>を作成、提出した。これらのエッセイの中から、国際共修プログラムに参加したことによって得たことに関する箇所を抜粋して紹介する。

##### A. 渡航・対面型

###### (1) 協働活動からの学び

While playing the game in the second class I found out that we the people are so focused on achieving our own goals that we hardly see what is happening in the world and does not even bother to look at the world condition meter. If the developmental activities were carried out in accordance with the needs reflected on the word meter than everybody would have been self sustained and no one would have been the victim of externalities.

このプログラムを通して、自分が一番得たことは、「目の前の小さいことも大切にすること」である。将来や先のことを考えることも大切であるが、現状をしっかりと捉えることも重要で、それがまた先に繋がると感じた。例えば、SDGs Gameを行い、今後の世界のことを考えると、今行なっている自分の行動がのちに日本や世界に影響すると普段の生活で思うようになった。また、地球のことだけでなく、今自分が心地よく過ごせているのも当たり前のことではなく、感謝するべきだと感じる。今後、生きていく上で、ブータン人のように目の前の人や小さいことも大切にしていきたい。

MSBI@BTでは、プログラムの主題である2030アジェンダ（SDGs）についての理解を深めるために、カードゲーム「2030 SDGs」や地元学によるコミュニティマッピング手法を取り入れていた。学生のエッセイからは、SDGsの理解に加えて、日本人学生とブータン人学生の異なる視点を知る機会になっていたこと、ブータン人の生き方から取り入れてみたいことを見いだしていたことがわかる。

###### (2) 双方向の学びの価値

I am glad that I got an opportunity to meet such wonderful people and understand them even

11) 原文（RTC生英語、関大生日本語）のまま紹介する。



though communication was a small problem it was a new experience for me entirely. I personally feel that there are a ton of things Bhutanese and Japanese can learn from one another. I hope that there are future exchanges which I feel that both Bhutanese and the Japanese can benefit from.

このプログラムでの経験は、「当たり前のことを当たり前で感謝する」ということを身をもって体験した。それぞれ感じたものは違うと思うが、プログラム内で行ったアクティビティ以外でも、ブータン人の4人の参加者と何気ない会話をしているとき、RTCの学生が通常の授業を受けている様子を見たときでさえも感じた。プログラム内でGDPとGNHについてディベートを行った際、しっかりとした意見と反論を述べられた際は、日本人に慣れないディベート式や彼ら英語力に圧倒された。相手の意見をしっかりと理解することが出来ず、力になれない無力感がとても悔しかった。しかし、そんな私たちにも4人はずっと優しく気にかけてくれ、本当に感謝でいっぱいだ。当初に期待していた、彼らと築き上げる友情を数倍こえて深い友情を築けたと思う。彼らとの会話で互いの文化、国、人に興味を持ち、もっと知りたいと思えた。実際にこのプログラムに参加しなければ味わうことのできなかったであろう。今後、ブータンに関わらず積極的に参加していきたい。

MSBI@BTプログラムでは、「国際共修」を重視して設計したが、学生からのエッセイから、各々のキャンパスのクラスメートとは異なる学習と自己研鑽への刺激を得たことがわかる。関大生のエッセイにあるように、短期間のプログラムであったにも関わらず、学びから友情へと発展しているのは、共修プログラムの重要な成果と考えられる。

### (3) 対話とコミュニケーションの重要性

持続的な開発とは、経済的な要素だけが独り歩きすることではない。(社会的、文化的な要素にも同じことが言える)、国や企業、市民など全てのアクターの連携と協力が不可欠となってくる。なにか共通したゴールを実現するため、少しでも近づくため、国際的な会議や会話は多く開かれている。そのような場は「対話」の機会を設けるという点に確かな意義があるのだと認識できた。

プログラム全体を通して一番感じたことは、コミュニケーションは難しいということである。しかしそれはとても楽しいことで、そしてなにより現在の社会システムのなかで生きていくには必要で重要なことである。嫌なことがあったり困難に直面したり、そもそもコミュニケーションそのものがストレスになることも少なくはないが、会話をして励ましてもらったり、アドバイスをもらったりすると支えになる。やはりコミュニケーションによって人は救われるのではないだろうか。だから一人一人を孤立させないこと、孤独を感じさせないことが大切である。

異文化を認め合うためには、お互いのことをよく知ることなしには始まることはない。MSBI@BTは、学生同士のコミュニケーションを促し、素顔を出せる対話づくりを重視していた。学生のエッセイから、コミュニケーションや対話の重要性が国際社会と身近な生活の中で重要であることが指摘されており、プログラムの学びをどう活かしていくかにつ

ながる可能性を見て取れた。

## B. オンライン・遠隔型

### (1) 異文化の視点を取り入れた学習経験

This session gave me a platform to research the field which I am passionate about, which is “the Quality of Education in Bhutan” during the time of pandemic. Moreover, I am contented that I could share my findings to my Japanese friends who reciprocated with much enthusiasm and constructive comments. Besides, I am very pleased that I could meet Japanese friends and other university faculty who were very encouraging and forthcoming. This cross-cultural learning has served the very purpose of learning something beyond the classroom walls.

The exciting part about this seminar was exchanging our cultures and talking about our country and the lifestyle to our Japanese friends. In addition, we not only discussed the bright and good sides of our countries but also discussed about serious issues and problems that both the countries are currently facing. Moreover, we have also discussed about the new normal in both the countries and how we are going about with the virus across the globe. Also the fact that we had guest speakers made the event more fun where both the countries had chosen two person who are very familiar with both the countries. The seminar was a very fun learning program and I enjoyed all the events and even the presentation slides of our Japanese friends were very cute and attractive.

このセミナーの良かったところは、方々に話を振っていく中で、ひとつの物事があらゆる関心へと導かれていくようにして学びの幅を膨らすことができたところです。ブータンと日本の宗教観の違いは地域のコミュニティの違いにも現れており、日本の都市に住む人々の孤独感や地域的なつながりの弱さを考えるきっかけにもなりました。それは、ブータンのことを知れば同時に日本のことについても自然と考えるようになるからで、まさにその点が共同学習の一番の利点なのだと思います。その他にも自分や周りがアルバイトをすることに今までなんの違和感もなかったので、ブータンでは学生のアルバイトが一般的ではないということにも驚きました。ブータンと日本では経済のシステムもまた違うのだと思います。ブータンの学生がどのようなことに関心があるのか（それぞれどんなテーマを選んで発表したのか）、どのような暮らしをしているのか、本や資料でブータンのことを調べるのととはまた違って、ブータンの今がより鮮明に見えたような気がします。

お互いに興味のある分野についてプレゼンしあってみて、国によって傾向の違いは出るのかな？と思っていましたが、ここは逆にどちらも同じぐらいばらけていたのも興味深かったです。プレゼンの内容についての感想はセミナー中でもディスカッションしたので割愛しますが、その中にはこういうきっかけありきで知ったことや、相手がプレゼンしてくれて初めて知ったことがたくさんありました。現状存在する問題に興味を持つことや、それを解決したいと願うこと、実際に解決するために行動するためには「知ること」「身近に感じること」が必要不可欠だと私は考えています。冒頭で、今回のことを稀有な経験と言いましたが、私はこれが稀有な経験でなくなることを願っています。物理的に距離を隔てて、言語や文化の違う人々とも当然のように関わり合えるようになることは、SDGsの掲げる「誰一人取り残さない社会」づくりに繋がることだと考えるからです。このような機会が、ど

んな年齢のどんな立場の人にも訪れるといいと思いました。新型コロナウイルス流行で失われたことは多いですが（例えば本来私たちが行くはずだったブータンへ直接渡航の計画とか）、逆に今回のような場も生んでくれました。これが、いずれ誰でもインターネットを通じて理解し合えるよりよい未来のための足掛かりになれば一番いいと思います。

オンライン・遠隔型の国際共修プログラムは、参加学生間で意見交換の機会を数多くつくっていくことによって、思考力や洞察力を深めていくことを目指していた。学生の声からは、オンライン上でのごく限られた時間の交流であったけれども、日本の学生、ブータンの学生の考え方の違いを素直に受け止めて、自らの考える力に取り組もうとしていることがわかった。あたかも、対面で演習科目に参加しているかのような学びに近い経験をしたといえる。お互いの関心あるテーマを共有し、その関心について他学生から刺激をもらうという双方向の共修プロセスの成果は予想以上に大きいと考えてよいだろう。

## (2) ブータンと日本の学生生活の捉え方の違い

I was personally overwhelmed with the problems occurred to Japanese students. Not in regards to academia but in regards to finding a job. It is unnatural to find students working and studying at the same time in Bhutan but it is considered efficient and independent in Japan. The level of maturity and independency is different and unique in each culture and tradition thus, with the help of the program. I was exposed to such culture and tradition uncovered a little part of the world.

オンライン国際共修セミナーに参加し、ティンブーに住む学生たちと交流したことで様々な発見がありました。特に印象に残ったのは、私が親元を離れてアルバイトをしながら一人暮らしをしていることに対して、女子学生の皆が私が自立していて素晴らしい、羨ましいというふうに関心を述べていたこと。今日日本で女子大学生の一人暮らしというのは珍しくもないし、学費も生活費も全て自分で賄っているなら私も同じ感想を抱いたかもしれませんが（というか、そう思われていたかもしれない）、私は家族に学費を払ってもらっているし、生活費も一部出してもらっています。お金のやりくりを間違えてインスタント麺しか食べられない日がある私よりも、流暢に英語でディスカッションを回し、濃い内容のスライドでプレゼンテーションを行っていた彼女たちの方がよほどしっかりして見えたのに、国が違えばこうも違うという現実を知識ではなく体験としてわかることができました。

参加学生の間で高い関心を集めたのが日本の学生のアルバイト事情についての話であった。これは、プログラムの主題と深く関係するものではなかったが、学生の日常生活のエピソードから日本とブータンの社会の違いに関心を向けるという共修経験を得られた。対面型であれば、プログラム外の雑談の機会が多く、そのような中で取り込んでいけることであるが、遠隔型であっても学生の素顔を出していくことによって、可能になることを実感できた。

### (3) 将来の生き方

自分の興味のあるテーマを調べ共有し、ディスカッションすることができた。オンライン英会話が少しは役に立ったかなと思うが、もっと話せばもっと濃い時間が過ごせたなと思うと、やっぱり言語は大事だと思った。もっと話したいことがあったなと思う。このディスカッションを通して、SDGsに対してより興味を持てたと思う。今まではプラスチックのこししか興味がなかったけど、食品ロスとか教育とか貧困とかさらに多くの問題にも目を向けたいと思うようになった。日本のことだけでなく世界のことももっと知りたいと思ったし、私に何かできないものかとも思った。私は来年から教員なる予定である。私が教員になろうと思ったのは、私の経験から生徒に様々な選択肢を与えたいと思ったからである。そして、このプログラムの経験は私が教員になったときにとても財産になると思っている。行くことはできなかったが、それぞれの国の問題をディスカッションして感じたことなどを生徒に伝えたいと思った。そして、私の将来の目標は、海外、特に途上国で教育活動することである。SDGsは世界共通のWordで達成しなければならない課題である。このプログラムで学んだことも含めて、私にできる何かで、将来海外で行動できるような人間になりたいと思う。

国際共修プログラムに参加したことによって、自分の将来目標が変わり、大学院進学から教員へと進路を変更したという。MSBI@BTに参加することで、何かを感じ取ってほしいと期待していたが、オンライン・遠隔型であっても、自分は何をしたいのかを明確にし、生き方につなげていくことができることを実感した。国際共修プログラムを実践していくことの価値を再確認させてくれた。

以上から、渡航・対面型、オンライン・遠隔型というセミナー形式に関係なく、日本の学生がブータンの学生と共通のテーマについて真剣に意見を出し合い、また、共同作業を行うという経験は、時間の経過とともに消失することはなく、むしろ、各々の意識や考え方を換え、物事の選択や判断に影響を与えているということが推察できる。この点からも、学生が主体的に学び合う機会となる国際共修プログラムの教育的効果を見て取ることができる。

## 5. おわりに～国際共修プログラムの意義と課題

国際共修が学生の教育にどのような影響を与えるのかは、1つの試行プロジェクトから見いだせることには限界がある。そこで、体験学習や協働実践によって、学生教育に取り組んできた大学教職員を招聘し、「共修プログラムの可能性と課題」をテーマにした研究セミナーをオンラインで開催(2021年1月30日)し、共修プログラムの可能性と課題について意見交換した。このセミナーの意見交換とMSBI@BTの実践をもとにして、国際共修プログラムの意義と課題をまとめておく。

### (1) 渡航・対面型国際共修プログラムの参加のハードル

渡航・対面型の国際共修プログラムの学びの価値は大きいですが、費用面が学生の参加のハードルになっているとの指摘がなされた。MSBI@BT プログラムの場合、ブータンの村におけるコミュニティマッピングの研修が渡航学生のみならず、ブータンの学生にとっても視野を広げて、思考力を高めるために有効である。オンライン・遠隔型では獲得できない学びの機会であるため、渡航・対面型のプログラムを実施することに意義はある。しかし、参加費用が参加者の裾野を狭めてしまいかねない。国際共修プログラム参加費用を軽減できるような支援を工夫していくことが求められる。

### (2) 学生視点の学びの振り返りスキーム

国際共修プログラムを実施する場合には、プログラムの事前・事後の教育効果を確かめるための仕組みが重要ではあるが、他方、プログラム実施中において、個別に、参加学生に寄り添って、学生が学びの当事者としての振り返りの仕組みを組み込んでいくことが必要であることが指摘された。MSBI@BT の場合、渡航・対面型のプログラムでは、クラス全体の振り返りの機会を組み込んでいたが、個別で振り返りを行う仕組みを設計してはいなかった。クラス全体では、プログラムに直結する学びの振り返りが主になるが、個々の学生の視点に立っての振り返りが十分に行われるとは限らない。個別の面談を組み込むなどが必要であることが示唆された。また、教育効果を把握するためには、中・長期での国際共修プログラム参加の効果をフォローアップするしくみを検討しておくことも指摘された。

本論では、国際共修プログラムである MSBI@BT（渡航・対面型とオンライン・遠隔型）の試行について紹介し、参加学生の教育効果を評価尺度とエッセイの2つのデータをもとにして整理した。これらの実践から示唆されるのは、渡航型、オンライン型のどちらであっても、異文化を尊重しながらの学び合いの機会は、学生の主体性を引き出すためのプログラムデザインと教員のファシリテーション能力、そして、参加学生の省察のしくみを組み合わせることによって、学生を主体的な個に成長させる可能性が十分にある。これは、ディープ・アクティブラーニングに通じる教育手法であるといえる。

瞬時にグローバルに情報が共有される国際社会の中で生きていく上で、多様性を認め合い、主体性を磨き上げて、協働できる人づくりが求められている。さまざまな社会課題を取り上げて国際共修プログラムを企画、実施していくことは、これからの社会を主体的に切り開いていく学生の育成につながると考えてよい。今後、さまざまな種類の共修プログラムを企画・実施し、多くの知見を蓄積し、広く共有していくことを期待したい。

<参考文献>

- 末松和子・秋庭裕子・米澤由香子（2019）国際共修 東信堂  
中央教育審議会（2012）『新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて——生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ——（答申）』（2012年8月28日）  
中井俊樹（2015）アクティブラーニング 玉川大学出版部  
松下佳代（2015）ディープ・アクティブラーニング 勁草書房  
吉本哲郎（2008）地元学をはじめよう 岩波ジュニア新書  
UN（2015）Transforming our world: the 2030 agenda for sustainable development. UN A/RES/70/1  
(<https://sdgs.un.org/2030agenda> 2021年6月15日閲覧)

謝辞：本国際共修プログラムの計画から推進に至るまで、ロイヤルティンブーカレッジ国際部長Samir Patel博士による支援と協力に感謝の意を表します。

—2021.6.30受稿—